

特集
平成28年度
「父母のための
教育講座」
講演抄録

玉川大学での挑戦

税所里帆

「父母のための教育講座」の今年度のテーマは「玉川大学の挑戦」として、昨年の3月に玉川大学を卒業したばかりの税所(さいしょ)里帆さんに登場していただきました。税所さんは在学中に留学や国連の専門機関でのインターンシップなどさまざまなことを体験。在学中に心がけたことや親との関わりなどについて語ってくださいました。コスモス祭期間中の11月12日(土)に開催された講演内容をご報告します。



PROFILE ●さいしょ・りほ

平成23年に玉川大学文学部比較文化学科(現・英語教育学科)に入学。2年次には奨学生としてオーストラリアのクイーンズランド大学へ留学。また4年次の1年間を休学し、国連の専門機関である世界観光機関でのインターンシップに参加。復学後はアメリカ大使館主催のエンバシーアカデミーに挑戦。全国から応募がある中で、10名という狭き門ながら採用される。平成28年3月に玉川大学を卒業。現在は(株)JTBグローバルマーケティング&トラベルに勤務。忙しい日々を送る。

留学、インターン、そして就職

皆さん、こんにちは。税所里帆と申します。今日は私が玉川大学在学時に経験したことをお話ししさせていただきますと思っています。

私は平成28年に文学部比較文化学科を卒業しました。現在の名称は英語教育学科です。そんな、まだ学生の気持ちを忘れていない私だからこそ、お伝えできることもあるのではないかと思います。

私は玉川大学に5年間在籍しましたが、実際にこのキャンパスに通ったのは3年間です。この5年間の学生生活を順に説明しますと、平成23年に入学し、2年次にはSAE留学プログラムでオーストラリアのクイーンズランド大学へ10ヶ月留学しました。このプログラムを利用したおかげで、留学先で学んだ授業も卒業単位として認定され、帰国後は友だちと同じ3年生に帰ってくることができました。

この海外留学で私がお話ししたいのは、

1年次からの準備です。留学への熱意が強かった私は、大学に入学した翌日には国際教育センターへ行き、留学したいという希望を伝えていました。そしてまず考えたのが、留学費用の工面です。親の援助もありましたが、自分にもできることはないだろうかと考え、勉学に励んで奨学金を受給しました。それでも足りない分はアルバイトをして留学資金に回しました。こうして留学が実現したのですが、現地では日本人と一緒にいても決して日本語を話さないなど、努力を欠かしませんでした。

そうした甲斐もあり、留学前は460点だったTOEIC®のスコアも、10ヶ月で895点まで伸ばすことができました。帰国後も勉強を続け、現在では970点になっています。勉強以外にも、物事をポジティブに捉えられるようになったと思います。

こうして帰国した私が出会ったのが、世界観光機関での1年間のインターンシップというお話です。とても狭き門で、本当に奇跡のような出来事なのですが採用されました。これは日本人では二人目。大学生としては初めてのことでそうです。

勤務地はスペインのマドリッドで、アジア太平洋地域での観光に関する国際会議の

企画や運営に関して、上司のアシスタントとして勤務しました。この国際機関で働き、上司にも認めてもらえたことが、大きな自信となりました。またこの国際機関は世界中から多種多様な人が集まって働いているのですが、私も将来こんな職場で働きたいという思いを強くしました。

そして帰国後は玉川大学に復学すると同時に、アメリカ大使館が主催するエンバシーアカデミーに応募。参加者が10名限定という狭き門を通過することができました。このプログラムは毎月学生が集まってアメリカの外交官などのレクチャーを受けながら、アメリカの外交や人種差別といった課題についてディベートやディスカッションを行うというものです。また期間中には学生のみで企画を立て、高校生対象のマイノリティをテーマにしたイベントも開催しました。

こうした経験を重ねたことで、仕事についても身に付けた語学力や異文化理解力を生かせる場所がよいと考え、JTBグローバルマーケティング&トラベルという会社

に就職しました。この会社はインバウンド専門の旅行会社であり、私は現在スペイン・ポルトガル語圏のお客様を担当しています。日々英語とスペイン語を使って仕事をしていますし、旅を通して日本の地域貢献、地域発展に寄与しているという実感もあり、毎日やり甲斐を持って働くことができています。

人との出会いに彩られた学生生活

さて、こんな私ですが、玉川大学だからこそ実現できたと思っていることが幾つかあ



多くの人との出会いから、国連機関でのインターンや
米国大使館のプログラムに参加。

ります。まず、正解の型が決まっていけないこと。大学は4年で卒業しなければいけないといった固定観念がなく、自由な挑戦ができたと思います。自由でのびのびとした環境も、私を後押ししてくれました。

また、一人ひとりの学生を先生方や職員の方がしつかりと見てくれています。そして最も大きいのが人との出会いです。

なぜ私が世界観光機関でのインターンシップに行けたかといえば、留学後に学内誌の取材を受けたのですが、その記者の方が、私が興味を持っていたトラベルライターの経験のある方だったんですね。

後日その経験談をお伺いしたのですが、ある日、その方からメールがあり、インターンシップの応募用紙が送られてきました。そのときのメールの文面が今も忘れられません。「この応募用紙を見て、あなたのことを思い出しました。あのときのあなたの熱意が忘れられません。もしかしたら興味があるかもしれないから、送りますね」。この記者の方のように学生の熱意をくみ取ってくれて、さらにその先へとつなげようと

してくれる。そんな熱意を持った先生方やスタッフの方が、玉川大学には多くいらっしやいます。

エンバシーアカデミーへの応募でも、志望動機を書き上げる際に先生が何度も添削をして下さったり、卒業論文でも先生に指導を受けたことで最優秀卒業論文賞を受賞することができました。

こんな素敵な先生方に助けていただいた私の学生生活ですが、モットーにしていたことがあります。それは「やらない後悔よりやる後悔」ということです。

私は中学校から玉川に入学し、中学・高校と吹奏楽部に所属していました。クラリネット担当だったので、クラリネットには小型で高い、目立つ音を出すタイプがあります。それを吹いてみたいと思ったのですが、当時の私は引っ込み思案で言い出せずにいました。そんなとき、先輩が「先輩、やって後悔するのなら、やった分だけ前に踏み出しているじゃないですか。もしやらなければ何も得ないで終わりますよ」と、先輩ながら大人びた意見を言ってくれたんで



すね。その言葉が私の胸にグサッと刺さり、挑戦することになりました。以来、この言葉をモットーに、いろいろなことに挑戦してきたのです。

この「挑戦」についてもお話ししたいと思います。挑戦には、幾つか欠かせないことがあります。まず、興味があることは口に出すこと。先ほどのインターンシップへの挑戦も、私がトラベルライターに興味があると言っていたからこそ、掴むことができたチャンスでした。また自分に素直でいること、自分に限界を作らないこと、目標を定めて諦めないことも欠かせませんね。そして「本当に後悔しないの？」と自分に問いかけることも必要。新しいことに取り組むだけが挑戦ではなく、留まることも一つの挑戦

**自分の人生の決定権は自分にある。
同時に、その責任も自分にあります。**

です。

ただ、振り返ったときに後悔しないのかと自分自身に問いかけることが大切で、そこで気持ちが揺らぐのなら、もう一度考え直さなければいけないと思います。

無干渉でも無関心ではなごいよ

ここまでずっと私のことをお話しさせていただいたのですが、今回は親御さんがいらしているのです、私の親が私にしてくれたことについてもお話ししたいと思います。あくまでこれは我が家の例であり、すべての方に当てはまるわけではないと思いますが。

私の親を一言で表すならば、「無干渉」となります。ただ、重要なのは適度な無干渉であるということです。普段出掛けるときはもちろん、海外で生活しているときも基本的にはほったらかしでした。そこまで無干



渉だと、逆にこちらから言いたくもありませんよ。そんな気持ちを起こさせる、いい無干渉だと思います。ただ無干渉ではあるけれど、無関心ではないんです。私が興味があるということについては一生懸命資料を集めてくれたりといった、さりげないサポートがありました。こうしたバランスが私にとって心地よくて、自立を促してくれたのではないかと思っています。

二つ目は、比較をしないということ。私には二歳年下の弟がいますが、比べられたことがありません。また、普通の人なら大学を4年で卒業するはずとか、自分の時代はこうだったといった話もありませんでした。だからこそ、我が道を進んで来られたのだと思います。

三つ目は挑戦させるといふことなんです。自分の人生の決定権は自分にあると同時に、その責任も自分が負うものだと思付かせてくれました。

「インターンシップで1年間スペインに行ってくるから」なんて、普通の親であれば心配をしますよね。きっと私の親でも不安だったと思うんです。けれども親の返事は「いってらっしゃい」の一言だけでした。私のやりたいことを応援してくれる、そんな挑戦をさせてくれたと思っています。

思い返すと親に何かをやらえと言われたことはないのですが、それは「人に言われて何かをしたら、失敗したときにその人のせいにする。でも自分で決めたことなら失敗しても誰も責めることができないから」ということでした。本当にその通りだと思うし、自分の子どもにもそんな素敵な言葉が言える親になりたいと思っています。

いろいろな影響があつて、現在の私ができていくわけですが、本当に人生のどの選択、どの出会いを逃しても、今の自分になかったと感じています。特に私の話の中で多く出てきたのが人との出会いだったと思います。さすがに大切に思います。出会いそのものより、その人から言われたことや、その人が起こしてくれたアクションが、私にとって大きな変化を与えてくれたと感じています。そんな方々に恩返しができるよう、今後も挑戦し続けたいと思っています。

最後になりますが、新入社員という立場でありながら、このような場に呼んでいただけたことをありがたく思っています。今日この機会を作って下さった父母会の皆様と大学の方々、そして私をここに立たせてくれた教授と、後は親と、もちろん皆様にも感謝を申し上げたいと思っております。本日はご清聴ありがとうございました。